現代漢語における「無主句」と「存現結構」について

鈴　木　義　昭

日本語で，「主題がなくて，叙述部だけで成り立つ文」，「事物・現象の存在を言う文」のことを漢語の文法用語を借りて，「存現文」と言うことがある（佐治圭三「題述文と存現文」・他）。[1] 漢語においては，「主題がなくて，叙述部だけ」の文を「無主句」（「無主題文」），「事物・現象の存在」を言う文を「存現結構」（「存現構造」）の文と呼んでいる。漢語文法の一般的な分類概念からすれば，「存現結構」の文は「無主句」の中の一部である。すなわち，「無主句」が主題のない文の総称であるのに対して，「存現結構」の文は文章の表す意味から，そうした構造を持つ文自体に付けられた名称と考えることができる。ここでは，この二つについて報告をするとともに，随時必要に応じて日本語との比較を行なうことにする。

＊　　＊

さて，漢語における無主句は比較的早い時期からその存在が承認されており，各者各様の説明がなされてきた。以下，郭中平『簡略句・無主句・独詞句』によって簡単に諸説を挙げる。[2] 馬建忠の「無属動字」（『馬氏文通』），章士釗の「虚格」（『中等国文典』），呂叔湘の「無起詞」（『中国文法要略』）などがあり，王力の「無主句」（『中国語法理論』）に至って，普遍的な言い方となっている。またその分類では，章士釗が三種類説，呂叔湘も同じく三種類説，王力は五種類説を唱える。高名凱（『漢語語法論』）および丁声樹等（『現代漢語語法講話』）はともに四種類説に与す。郭中平は王力と同じく五種類説を取る。ここでは，さらに郭中平のそれによって例

を挙げ，上述各家との相違点等を眺めてゆきたい（郭中平・前掲書が系統的に述べている）。

(一) 説明自然現象或者事实情况的（自然現象あるいは事実・情況を説明するもの）

① 下雨了。（雨が降ってきた。）

② 出太阳了。（太陽が出た。）

〔自然現象〕

③ 散会了。（会が終った。）

④ 放暑假了。（夏休みが始まった。）

〔事実や情況〕

これらの場合，語順はある特定なケースを除いて，「動詞＋名詞」の形を用い，「雨下了。」，「太阳出了。」などとはならない。例文の（　）内に付した日本語訳からも窺われるように，日本語においても，通常こうした文意を表す時には，「雨は降ってきた。」，「太陽は出た。」のようにはならないわけである。漢語が動詞と名詞の位置関係（語順）によって文意の識別を行なったように，日本語では「は」と「が」との使い分けをすることによって，その差異を分別することになる。①・②のタイプの文が呂叔湘の言う「自然現象」[3] であり，王力の「天時的事件」[4] である。ただ，両家とも③・④についての言及はない。

(二) 表示一般的要求或者禁止的（一般的な要求あるいは禁止を表すもの）

⑤ 请排队上车！（どうぞ並んでご乗車下さい。）

⑥ 要继承祖国的优良传统！（祖国の優れた伝統を受け継ごう。）

〔一般的な要求〕

⑦ 谢绝参观！（見学おことわり）

⑧ 不得迟到早退。（遅刻・早退をするな。）

〔禁止〕

構造的に言えば，確かに主題に当るものを欠いている文章である。しかし，日本語においては，主題に当るものがないというよりは，むしろ用言や助動詞の命令形，ある種の助詞などを用いて処理されることが多いのではないか。漢語においては，章士釗が「命令句」と名づける[5]以外，特別な命名はないようである。

㈢ 説明事物的存在・出現或者消失的（事物の存在・出現あるいは消失を説明するもの）

⑨ 现在那边田里还留着几条短短的战壕。（今もなおあの畑には短い塹壕のいくつかが残っている。）

⑩ 苍黄的天底下，远近横着几条萧索的荒村。（黄色く青みがかった空の下に，遠く近く物寂しげな荒れた村が横たわっている。）

〔事物の存在——a〕

⑪ 马嘴的长毛上，结了层白霜。（馬の長い口ひげに，霜が降りていた。）

⑫ 我的脑里忽然闪出一幅神异的图画来。（私の脳裡に突然奇妙な絵がひらめいた。）

〔事物の出現〕

⑬ 稻场上和小溪边顿时少了那些女人们的踪迹。（脱穀場や小川のほとりからたちまちにしてあの女たちの足どりが消えた。）

⑭ 轻轻地从我的琴弦上失掉了成年的忧伤。（私の心からふわっと一年の憂いが消えた。）

〔事物の消失〕

⑮ 只在“文艺新闻”上有点隐约其辞的文章。（「文芸ニュース」誌上にだけ，歯切れの悪い文章が載った。）

⑯ 没有一个人家漏出灯光。（どの家も灯火を漏らすものがなかった。）

〔事物の存在——b〕

ここに挙げた⑨～⑯の例文は，言うまでもなく主題を持たず，しかもいず

れも文頭に場所を示す語が来る。そしてその後ろが「動詞＋名詞」という語順になっている。次項で詳しく眺めることにしたいが，これらは㈠とともに，典型的な存現結構の文である。なお，「事物の存在」を表すものにa・b二つのタイプがある（記号は筆者）のは，特にbに用いられている動詞「有」と「在」とに用法上の相違点があるのを考慮していることによる。また，aには「着」・「了」というアスペクト詞が付くことも，その特徴の一つである。訳文のように，日本語でも㈠と同様，「は」と「が」の使い分けによって文意を識別しているわけである。

㈣ 一部分格言〈包括谚语〉（一部の格言〈ことわざを含む〉）

⑰ 不经一事，不长一智。（一事を経ざれば，一智に長ぜず。）

⑱ 知己知彼，百战百胜。（己れを知り彼を知らば，百戦して百勝せん。）

これらは章士釗が「句之言眞理者」（真理を言う文）と言い，[6] 王力が「真理的陈说」[7] と分類するものに相当する。一般性客観性の強い言語表現である格言，ことわざにおいては，特定の主語を必要としないということになるであろう。⑰・⑱では敢えて文語ふうの訳語を添えておいたが，中国人の意識の中には「決り文句」としてのある種の語感があると思われる。日本語において，古典（漢文も含む）などから出たものについては，よく似ているであろう。

㈤ 以上四种类型以外的一些无主句（以上の四種類型以外の無主題文）

⑲ 看看你们这些专制魔王的蠢相。（お前たちのこうした専制的魔王のような愚かしい姿が見えた。）

⑳ 只能模糊地看见有人在往前走。（誰れかが前に歩いてゆくのがただぼんやりと見えるだけだった。）

〔文の始めが動詞であるもの（ものによっては前に修飾語や能願動詞が付くこともある）〕

㉑ 是我错了。（私がまちがえたのだ。）

㉒ 刚才是谁在喊你？（誰れが今君を大声で呼んでいたのか。）
〔文の始めが判断詞であるもの（ものによっては前に連体修飾語が付くこともある）〕

⑲・⑳が一般動詞，㉑・㉒が特殊動詞「是」という違いはあれ，冒頭に来るものが動詞である点では一致している。しかし，形式上からはともに主題に当るものを欠いているわけである。ただ，前者は㈣にも似て，文脈の上から主題を特定する必要がない。後者も「是字句」の中の形式と考えれば，現実の言語生活における普遍的な現象ではある。

*　　*

語順および文の意味するところからみて，前項で挙げた例の中の㈠と㈢が「存現結構」の文である。ここでは㈢のタイプに注目したい。これについては張志公『漢語語法常識』[8] の分析が詳しい。以下は張志公説を取り上げながら，話を進めてゆくことにする。

張志公はこうした形式の文を「叙述句」（「叙述文」）の一つとする。そしてそれを「存在」と「出現和消失」（「出現と消失」）の二つに分ける。すなわち，

㈠ 「存在」――「在」と「有」――

(1) 某人某物　存在於　某处

㉓ 书在桌子上。（本は机の上にある。）

㉔ 老王在办公室里。（王さんは事務室にいる。）

(2) 某处　存在着　某人某物

㉕ 桌子上有书。（机の上に本がある。）

㉖ 办公室里有三个人。（事務室に三人の人がいる〔人が三人いる〕。）

これら(1)・(2)は訳語に見られるように，日本語ではこの間の相違を「は」と「が」によって区別する。すなわち，「は」の使われている「书」は，話し手と聞き手の間ですでに話題となっている「本」という意味で，「既知」

の情報であり，「が」の方は机の上に何があるという新しい情報の意味で「未知」を表している。大河内康憲氏はこうした考え方に立って，「有」と「在」との相違を説明している。[9] また，「有」と「在」とがともに状態動詞であるために，状態相を表す「着」がつかないことも理解できよう。なお，「在」には「在＋動詞／形容詞＋（着・呢）という形を取ることによって進行・状態を表す機能がある。

(二) 「存在」――他の動詞――

(1) 某処　存在着　某人某物

㉗ 村口站着大羣人。（村の入り口に多くの人々が立っている。）

㉘ 炕头上並排躺着四五个年轻的人民军。（オンドルの上に年若い，四五人の人民軍（の兵士たち）が並んで横たわっている。）

この構造は「有」に似ており，時によっては「有」を用いて文を改めても，意味に変りがないとされる。[10] この際，例文にあるとおり，動詞の後に「着」をつけることが圧倒的に多い。㉗・㉘の訳文では「動詞＋て＋いる」の構文を用いているわけであるが，日本語が「て＋いる」を付加することによって，継続動詞を状態動詞化する[11] ように，漢語では「着」をつけることにより，状態化していると言えるであろう。この種の文には二種類の動詞が用いられると言う。すなわち，

(2) 代表人体或物件静止时的动作的（人体あるいは物体が静止している時の動作を代表するもの）

（例）「站」（立つ）・「躺」（横たわる）・「簇拥」（群がり取り囲む）・「横」（横にする，横たわる）・「停」（とまる，やむ）・「坐」（坐る）・「靠」（寄りかかる）・「蹲」（うずくまる）・「趴」（もたれる）・「藏」（隠れる）

(3) 代表安放物件的动作的（物を置く動作を代表するもの）

（例）「放」（置く）・「掛」（かける）・「锁」（鍵をかける）・「粘」（くっつく）・「印」（ぴたりと合う）・「抹」（塗る）・「吊」（かける）

・「貼」（はる）・「糊」（塗る）・「蒙」（かぶせる）・「蓋」（かぶせる）・「堵」（ふさぐ，さえぎる）・「架」（ささえる）・「支」（支える）・「摆」（並べる，置く）

(2)・(3)に挙げられた動詞はいずれも金田一春彦氏言う「継続動詞」・「瞬間動詞」である。無論，瞬間動詞は進行体を取らず，結果の状態を示しているわけで，漢語動詞においても結果の存在の意味で，「存在句」とするのもゆえなしとしないであろう。後に范方蓮は(2)・(3)に当る動詞を「不及物动词」（自動詞）・「及物动词」（他動詞）・「及物不及物两用动词」（自他両用動詞）の三つに分類した。[12] この中で他動詞に「着」のついたものに注意を払っている。例えば，「他写字。」は「字写着。」とならないと言っているが，[13]「字」と「写」の間に能動関係がないばかりか，「字」自体に場所性がないことによって，成立しないものと思われる。

㈢ 出現・消失

(1) 動詞「出现」・「发生」・「不见」を用いるもの

㉙ 弯弯曲曲的汽车道上，出现了一部甲虫似的卡车。（曲がりくねった自動車道に，甲虫に似たトラックが現れた。）

㉚ 村里也没有发生意外。（村にも意外なことが起きなかった。）

㉛ 图书馆里不见了两本书。（図書館から二冊の本が見えなくなった。）

(2) 動詞「来」・「起」・「出」・「走」・「跑」・「死」を用いるもの。

㉜ 这时门口来了个卖西瓜的。（この時，入り口から西瓜売りがやって来た。）

㉝ 西南天上起了烏云。（西南の空に黒雲が発生した。）

㉞ 村子裏出了一件新闻。（村に件のニュースがまきおこった。）

㉟ 我们班上最近走了一位同学。（わたしたちのクラスから最近一人の同級生が転校していった。）

㊱ 家里死了一条牛。（家で一匹の牛が死んだ。）

(3) 「来」の複合詞

「进来」・「出来」・「上来」・「下来」・「过来」・「起来」など（例文省略）

これら(1)・(2)・(3)の場合，先に挙げた㈠・㈡の「存在」と違って，特に注意しておかねばならないのは，語順の問題もさることながら，「了」字が多く用いられていることであろう。そもそも，ある物事・動作の出現・消滅は瞬間的に行なわれる。したがって，そうした物事・動作は結果として残る場合もあれば，瞬時にして消滅・変化する場合もあるわけである。助詞「了」自体にも変化の出現を表わす働きがあり，両方でその働きをしていると考えられる。例文にあるように，ここで用いられる動詞は出現・消滅を表す瞬間動詞が多い。特に(2)の場合，動詞はいずれも瞬間動詞である。例えば，「家里死了一条牛。」において，そもそも「死」自体が存在の消滅を表す瞬間動詞であって，助詞「了」がさらに出現・変化を表わすものであるから，語彙自体から「存在文」となる資格を持っていると言えよう。また，「他死了父亲。」の文も，「主語述語論争」の折に議論の的となったもの[14]であるが，「他」という彼の身辺に「父の死」という出来ごとが出現したと考えれば，これもやはり「存在文」となるわけである。(3)の一連の複合詞も出現性を表す「来」が用いられた熟語であることから，(2)と同様に考えてよいであろう。

なお，張志公は形容詞については触れていない。確かに，

㊲ 天亮了。（夜が明けた。）

㊳ 头发白了。（髪の毛が白くなった。）

などのように，アスペクト詞の「了」用いることによって，新しい事態の出現を表すことができる。[15] しかし，語順は上の例のように，「名詞＋形容詞」となって，その反対にはなりにくい。言うまでもなく，形容詞が名詞を修飾することになり，文意の混同を招きやすいからである。なお，「是字句」に換えて，

㊴　天是亮了。（夜は明けた。）

㊵　头发是白了。（髪の毛は白くなった。）

とすることもできる。ただ題述化の働きを持つ「是」を使うことによって，顕題・陰題は区別されており，語順の変更をする必要がないのであろう。

＊　　＊

以上簡単に現代漢語における「無主句」と「存現結構」について眺めてみたが，かなりの部分で日本語の所謂「現象文」・「存在文」とも共通点を持つことが理解される。ただ，こうしたものは日漢両語のみならず，数多くの言語に存在すると言われる。そうした場合，古代漢語と古代日本語（特に訓点語等）との比較は有益であろうが，機会を改めたい。

注(1)　佐治圭三「題述文と存現文」―主語・主格・主題・叙述（部）などに関して―(「大阪外国語大学報」・Vo. 29　1973)

(2)　同書・新知識出版社・1957

(3)　『中国文法要略』による。

(4)　『中国語法理論』による。

(5)　『中等國文典』による。

(6)　注5に同じ

(7)　注4に同じ

(8)　同書・新知識出版社・1956

(9)　「中国語構文論の基礎」

(10)　注2に同じ

(11)　藤井正「『動詞て＋いる』の意味」（金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』所収）

(12)　「存在句」（『中国語文』Vo. 5　所収・1963）

(13)　同上

(14)　1955年7月から翌56年12月まで，「語文学習」誌上で行なわれた，主語と賓語をめぐる論争。

(15)　吕叔湘主編『现代汉语八百词』（商务书馆・1981）